

令和元年6月16日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03534

研究課題名(和文)「国際関係論」からの解放 「IR」から「歴史」への回帰

研究課題名(英文) Let's set ourselves free from International Relations---Return to History from IR

研究代表者

葛谷 彩 (KUZUYA, Aya)

明治学院大学・法学部・准教授

研究者番号：90362558

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「IR」が成立する以前(19世紀末)から現在に至るヨーロッパ、アメリカ及び日本などの国際秩序構想及びそれに関する研究を、国際政治思想史と外交史の両面から比較検討することで、「IR」を批判的に再検討し、これを補完するものである。研究を通じて以下の知見を得た。すなわち、国際関係を研究する方法としての歴史的アプローチの意義を、外交史・国際政治思想史・国際政治理論史の三つの視座から解明していくためのカテゴリを見出したことである。今後は国際関係を研究する方法としての歴史的アプローチの可能性を、メンバー間のみならず歴史学などの隣接分野との対話などを通じてさらに追究したい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、理論的志向が強い海外とりわけアメリカのIRに対して、歴史的アプローチの多面性とその効用を、5つのカテゴリを通じて示すことによりその欠陥を補完する。また歴史研究の多さをその特徴かつ強みとしつつも、歴史的アプローチの可能性を深く掘り下げてこなかった国内の国際政治学の問題点を補完する。さらに、グローバル化とそれに対する反発で従来のリベラル国際秩序が動揺する中、歴史的に相対化することで、現在の世界政治をより良く理解し、今後の展望を得るための示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：The object of this research is to reconsider critically “International Relations (IR)” and complement its defects by reviewing various ideas of international order in Europe, USA and Japan and the studies of them from the end of the 19th century before the genesis of “IR” to the present from viewpoints of both History of International Thoughts and History of Foreign Relations. Through this research we have found out the categories to elucidate the significance of historical approach as a method to study international relations from viewpoints of History of Foreign Relations, History of International Thoughts and History of International Relations Theory.

Based on them we will examine further the potentiality of historical approach as a method for studying international relations through dialogues not only between the members but also with the experts from neighboring fields such as History.

研究分野：国際政治学、ドイツ国際政治思想

キーワード：国際関係論 歴史 グローバリゼーション 国際政治思想 外交史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想に至った経緯：「アメリカの社会科学」としての国際関係論 (International Relations. 以下、IR) における歴史への回帰

研究代表者・申請者の葛谷は 20 世紀ドイツの国際政治思想を研究した。その中で認識したのは、戦後 (西) ドイツ国際関係論におけるアメリカ IR の影響の大きさ (レジーム論・平和研究などの隆盛) であった。しかし、近年ヨーロッパにおけるドイツの更なる大国化に対する関心から、IR の外では「ドイツの覇権国」論の復活など「歴史的回帰」論がさかんになり、それが IR に還元されて新たな特集号が刊行される事態となっている (Hellmann et.al 2015)。

このようにヨーロッパの中で「アメリカ」化が進んでいるドイツ IR でも、歴史的視点への関心が高まりつつあり、かつ IR 全体でも「歴史的転回」とも呼べる巨視的な歴史への関心や歴史と理論の対話などの試みが為されている。第一次世界大戦の衝撃を受けて誕生したとされる IR がその出発から外交史などの歴史研究から生まれたことはよく知られている。しかし近年のこうした「歴史」への回帰というべき潮流の背景として、理論の抽象化・脱歴史化を進めてきたアメリカ IR の現状への危機意識や批判が、アメリカやその他の国において顕著になっていることは疑いないであろう。

以上の着想から、本研究はグローバル化が始まり、それに伴って国際的現象を対象とする知としての「IR」が成立する前の 19 世紀末から、現在に至るまでの国際秩序構想とそれについての研究を対象とし、国際政治思想史と外交史の両面から、「歴史」の視座を国際政治研究に活かす方法を模索する。

(2) 国内外の研究動向：「アメリカの社会科学」の相対化の農、「歴史」の位置づけの曖昧さ

海外でもこうした問題意識を反映した取り組みは既に行われており、ひとつはアメリカ以外あるいは非西洋の国や地域での国際関係論の研究がある (Tichner and Blantly 2012)。もう一つは主にアメリカにおける外交史と国際政治学研究者による歴史と理論の対話の試みである (Elman & Elman 2001)。しかし前者は、アメリカ IR を相対化し、かつ非西洋の IR の独自性と利点を強調しようとするあまり、かえって「アメリカの社会科学」化したエピソードとしての非西洋 IR を提示するに終わっている。後者については、その意義は認めるものの、理論的・科学的手法が優勢なアメリカならではの試みであり、これが他国とりわけ歴史研究の比重の大きい我が国にとって参考になるのかという問題がある。さらに世界史における大転換期であり、かつ IR の成立の物質的・知的背景をなした 19 世紀を IR に取り込むという野心的な試みがある (Buzan and Lawson 2015)。これは 19 世紀を重視するという点で本研究の問題関心と重なるものがあり、注目に値するが、あくまで IR の枠組が前提となっているため、結局現在の IR の枠内にとどまった議論となっている。

他方、歴史研究と地域研究が優勢で歴史的アプローチが強いとされる我が国の国際政治学については、こうした独自性が活かされていないと言われる。その中でグローバル・ガバナンスに関する研究である遠藤編 (2010) は、歴史と思想の双方の観点に目配りした好著であり、本研究の問題意識に近いものであるが、対象とされている事例が英米に偏っており、かつグローバル・ヒストリーに歩み寄ったアプローチをとるがゆえに、主体としての国家や国家間の相互作用が後景に退くきらいがある。かかる問題意識に到達したのは、葛谷をはじめとする国際思想史研究者と小川をはじめとする外交史研究者が結集して立ち上げた共同研究を通じてである (基盤研究 (C)「アメリカの社会科学」を超えて：20 世紀国際秩序観の再検討 (H25~27 年度))。それは以下の 2 点の認識から成る。一つは上述した「アメリカの社会科学」を超える試みがかえってその再生産につながるという畏への気づきであり、これが英国学派を事例とする 2015 年度国際政治学会研究大会部会報告 2「古典的国際政治論の『英国学派』からの解放」に結実した (葛谷・西村・宮下豊)。もう一つは、国際政治思想史と外交史の若手研究者の間で対話を深める中で「歴史的」視点と手法の可能性を再確認したことである。以上の知見を踏まえて、本研究では、「アメリカの社会科学」という対象を超えて「IR」自体を相対化する必要から、19 世紀末に遡って「IR」以前の国際秩序をめぐる研究 (「外交史」「国際法」「地政学」など) をも射程に入れることで、「IR」の本来持っていた豊かな可能性を再発見し、これを活性化する手がかりを歴史的な手法に求めるものである。

引用文献

Gunther Hellmann, Daniel Jakobi, Ursula Stark Urrestarazu (hg.) (2015), „Früher, entschiedener und substantieller“? Die neue Debatte über Deutschlands Außenpolitik, *Zeitschrift für Außen- und Sicherheitspolitik*, Sonderheft 6.

Arlene B. Tickner, and David L. Blaney (eds.) (2012), *Thinking International Relations Differently*, London: Routledge.

Colin and Miriam Fendius Elman (eds.) (2001), *Bridges and Boundaries: Historians, Political Scientists, and the Study of International Relations*, Cambridge, Mass: MIT Press.

Barry Buzan and George Lawson (2015), *The Global Transformation: History, Modernity and the Making of International Relations*, Cambridge University Press.

遠藤乾 (編)『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』有斐閣、2010 年。

2. 研究の目的

本研究は、「IR」が成立する以前 (19 世紀末) から現在に至るヨーロッパ、アメリカ及び日本などの国際秩序構想及びそれに関する研究を、国際政治思想史と外交史の両面から比較検討

することで、「IR」を批判的に再検討し、これを補完するものである。本研究の目的は、以下の二つである。第一は、国際秩序観をめぐる国際政治思想史的・外交史的研究に関する文献・史料を収集・整理し、これを紙媒体およびウェブ媒体で公開することによって、国際秩序に関する歴史的研究のインフラを整備することである。第二は、「歴史」的研究の多さという我が国の国際政治学の特色を活かして研究を進め、その成果を国内外に発信することで、現在の「IR」の不備を補うと同時に、「IR」における歴史的手法の可能性を追究することである。

3. 研究の方法

本研究は、19世紀末から現在に至るヨーロッパ、アメリカ及び日本などの国際秩序構想及びそれに関する研究を、国際政治思想史と外交史の両面から比較検討することで、「IR」を批判的に再検討し、これを補完するものである。基本的な研究方法は、重要な一次史料・二次文献の収集・整理・公開、個別研究の深化、各研究の比較・総合である。とりわけ本研究の特色は、緊密な情報交換と異なる手法間の相互対話である。ウェブを通じた日常的な意見交換を前提に、全員が集まる研究会合を年2回、計6回行う。さらに年に1回はコメンテーターを招き、そのレビューを研究過程に織り込んでいく。研究成果については、研究会発表、学会報告そして最終的には書籍公刊の形で公開し、社会と学界への還元を行う。

4. 研究成果

(1) 研究の成果

歴史的アプローチの効用を5つのカテゴリーにまとめたこと。

本研究では、国際関係を研究する方法としての歴史的アプローチの意義をどのように明らかにしていくかを、各自の個別研究のテーマを提示し、議論していく中で、下記の5つのカテゴリーにまとめることができた。1) 歴史の拘束性の外交に及ぼす影響を明らかにする(外交史)、2) IR理論もしくはディシプリンを歴史的に相対化する(国際政治思想史・国際政治理論)、3) IR成立以前の国際関係論・秩序観を明らかにする(外交史・国際政治思想史)、4) 現代的テーマを歴史的に位置づける(外交史・国際政治思想史)、5) 現在のIRと歴史学に対して、古典的方法論(指導者論など)の有用性を訴える(国際政治思想史)。論集では、これらのカテゴリーから、国際関係を研究する手法としての歴史的アプローチの効用と意義を明らかにしていく(詳細は後述)。

スピノフとしてのIRの自己省察研究とそれが本研究にもたらした示唆

2018年11月に葛谷が編著者、西村が共著者として参加した論集『「国際政治学」は終わったのか? 日本からの応答』をナカニシヤ出版から刊行した。同書は2013年9月のEuropean Journal of International Relations (EJIR)の特集“The End of International Relations Theory?”に象徴されるIRの自己省察の試みを受けて、葛谷が企画し、研究分担者の西村邦行が司会を、同じく研究分担者の宮下雄一郎が討論者を担当した2017年度日本国際政治学会研究大会の同名部会のスピノフとして成立した。葛谷は序章「二つの「終わり」論と日本の視点」を、西村は第5章「統一を欠く分野 国際関係論の政治性」を著した。両者とも歴史的アプローチの有効性と重要性を説いている点で軌を一にする。なお同書の書評会が2018年度日本国際政治学会研究大会の分科会で開催され、葛谷と共編者の芝崎厚士氏が報告した。当日は盛況で活発な質疑応答が展開されるなど、わが国の国際政治学においてもディシプリンとしての国際関係論の自己省察や方法論への関心が高いことを認識した。それにより、わが国の国際政治学において特徴かつ強みとされながら、必ずしも方法論的分析が深めてこられなかった歴史的アプローチの考察の意義と需要の高さを確信した。

(2) 研究成果の国内外の研究における意義づけ

(海外)いわゆる理論志向の強い「アメリカIR」の牙城であるISA(国際関係研究学会)においても2013年に歴史研究部門が新設されるなど、歴史研究への関心は高まりを見せている。しかし、それらは既存のIRを批判ないしは相対化しようとする問題意識が先行するあまり、歴史的事象自体への関心が低いきらいがある。またグローバル・ヒストリーの導入や実証主義批判など、基本的に歴史学における議論の後追いというIRの宿痾ともいえる輸入学問の様相も露呈しており、国際関係のより良い理解という本来のIRの目的に適うとは言い難い。本研究では外交史や国際政治思想の研究者による個別的研究を通じて、その欠陥を補完することが可能であることを確認できた。

(国内)歴史研究の多さがわが国の国際政治学の特徴かつ強みであるとされながら、それが自明視され、方法論としての歴史的アプローチの可能性と意義が深く省察されないままに終わっている。近年わが国でもディシプリンとしての国際政治学や国際関係論を自己省察する研究論集が相次いで刊行されているにもかかわらず、そうした観点からの研究がないことがその証左である。本研究では、研究会を通じての議論や(1)の成果を通じて、国際関係を研究する手法としての歴史的アプローチの可能性を示唆することができた。

(3) 今後の展望

現在『国際関係の系譜学：外交・思想・理論』(仮)と題した論集の刊行に向けて準備中である。冷戦終焉20年を経て浮上した、いわば「歴史」の回帰とも言える諸問題(「リベラル秩序の終わり」「ナショナリズムやポピュリズムの台頭」「米中覇権をめぐる争い」など)に対して、さまざまな諸相をもつ歴史的アプローチを通じて読み解くことで、現在の世界政治の変貌への理解のみならず、それを研究する手法としての歴史的アプローチの可能性について、新たな視点や示唆を与えることを目的とする。なお「IR」やわが国の国際政治学における歴史的アプロ

一チの問題性を明らかにし、より複眼的な考察を可能にするために、各自の論考の執筆と並行して、グローバル・ヒストリーなど歴史学の専門家による本研究についてのレビューも予定している。目次案については以下の通りである。なお同論集は晃洋書房から2020年内に刊行される予定である。

(目次案) 「2つの国際秩序観と東アジア「国際社会」」(阿曾沼)、「イギリス対外政策の伝統と欧州統合「光栄ある孤立」からブレグジットへ」(小川)、「パックス・アメリカーナ以前の覇権論:19世紀末から20世紀前半ドイツにおける覇権論を手がかりに」(葛谷)、「フランス外交と『勢力均衡』」(小窪)、「「国際」関係以前の「国際関係論」志賀重昂の地理学」(春名)、「ウィルソン主義のレガシー(非西欧における)」(三牧)、「指導者論・政治家論の復権(アメリカの事例)」(宮下豊)、「中華の世界秩序観と国際関係論」(森田)、「日韓ナショナリズムをめぐる米国の役割(70年代朴政権)」(劉)、「統一ドイツ時のナショナリズムにおける過去」(板橋)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計39件)

2018年以降

板橋拓己、「制約なき完全な主権」を求めて 統一ドイツ NATO 帰属問題とゲンシャール外交、年報政治学、査読無、2019-1、2019年、印刷中

妹尾哲志、在欧米軍削減問題と西ドイツ外交 - 1960年代末から70年代初頭のオフセット交渉と負担分担問題に着目して、国際政治、査読有、196、2019年、印刷中

春名展生、地政学の政治的受容 小野塚喜平治ルートの素描、東京外国語大学論集、査読無、97、2018年、83-108、

<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/92832/1/acs097005.pdf>

info:doi/10.15026/92832

三牧聖子、ヨーロッパ知識人がみた知と権力 - ハンス・J・モーゲンソーとスタンリー・ホフマンのアメリカ知識人批判、アメリカ研究、査読有、53、2019年、印刷中

宮下雄一郎、フランス外交と日本をめぐる国際関係、一九四五 - 一九六四年、松山大学論集、査読無、30(5-1)、2018年、57-76、

https://matsuyama-u-r.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2726&item_no=1&page_id=13&block_id=21

2017年

板橋拓己、「新しい「ドイツ問題」 ドイツとヨーロッパ統合の関係を歴史的に振り返る、学際(統計研究会) 査読無、3、2017年、28-39

春名展生、「一九七〇年代における「人間と政治」 「間柄主義」「間人主義」の政治的含意、『東京外国語大学論集』、査読無、95、2017年、271-290

http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/89935/1/acs095002_ful.pdf

info:doi/10.15026/89935

宮下雄一郎、「第二次世界大戦と国際秩序構想、青淵、査読無、825、2017年、26-29、

2016年

葛谷彩、「敗戦国のリアリズム:1960年代の日本と西ドイツの比較の視点から、明治学院大学法学研究、査読無、101、2016年、115-137、

<http://hdl.handle.net/10723/2956>

板橋拓己、「『西洋を救え!』 アデナウアー政権とアーベントラント運動、ゲシヒテ(ドイツ現代史研究会編) 査読有、9、2016年、3-17、

URL: http://dogenken.web.fc2.com/gesch9/gesch9_3-18.pdf

塚田鉄也、「社会の安全保障:その理論的・政治的含意、桃山法学、査読無、26、2016年、87-107、

春名展生、「途絶えた系譜 リアリズムの受容、展開、そして反転、東京外国語大学論集、査読無、93、2016年、247-266、

10108/88076/1acs093002

[学会発表](計31件)

2018年以降

葛谷彩、「IR」から「歴史」への回帰 - 日本の国際政治学からの試み、日本国際政治学会、2018年

板橋拓己、「ナチズム、戦争、アメリカ 初代欧州委員会委員長ハルシュタインの思想形成過程、日本国際政治学会、2018年

小川浩之、「グローバリゼーションと冷戦のなかのアパルトヘイト終焉への道、冷戦史研究会、2018年

小川浩之、「Harold Macmillan's Commonwealth Tour of 1958 Revisited: The Case of Australia and New Zealand, The 1st British-East Asian Conference of Historians (BEACH)、2018年

Chihaya Kokubo、「Advancing Security Cooperation between Europe and Japan in the Indo-Pacific, "Connecting Europe's and Japan's Connectivity agendas: Prosperity and Security in the Indo-pacific" (Europe Policy Centre 主催の国際会議)、2019年

妹尾哲志、「東西緊張緩和と NATO 西ドイツの視点から、国際安全保障学会、2018年

春名展生、国際政治学の成立と地政学の受容 ラッツェル地理学の日本的・政治学的展開、日本国際政治学会、2018年

Seiko Mimaki, Jane Addams & Her Cosmopolitan Ethics, Symposium “The Living Legacy of First World War”、2018年

<https://www.carnegiecouncil.org/studio/multimedia/the-living-legacy-of-the-first-world-war>

宮下雄一郎、外政家としてのロベール・シューマンの思想 キリスト教・反共産主義・欧州統合、日本国際政治学会、2018年
2016年

妹尾哲志、1960年代末から70年代初頭の在欧米軍削減問題と西ドイツ外交 オフセット交渉と負担問題に着目して、日本国際政治学会、2016年

Michel Sapin, Lubor Jilek, Renaud Boulanger, Yuichiro Miyashita, Luc Brunet, Sherill Wells, Gérard Bossuat, Philippe Mioche, Laurent Warlouzet, Andreas Wilkens, Gilles Grin, Jean Monnet et les conflits sino-japonais des années trente, Association Jean Monnet, 2016.

Chihaya Kokubo, France and NATO Warsaw summit 2016, The Intra-Alliance Diplomacy and the 2016 NATO Warsaw Summit: the Goals and Tactics of European Allies, 2017.

三牧聖子、アジアにおける「戦争違法化」の意味、グローバルガバナンス学会、2017年
〔図書〕(計41件)

2018年以降

葛谷彩、西村邦行他、「国際政治学」は終わったのか？ 日本からの応答、ナカニシヤ出版、2018年、219(1-19, 108-123)

板橋拓己、網谷龍介他、戦後民主主義の青写真 ヨーロッパにおける統合とデモクラシー、ナカニシヤ出版、2019年、254(59-85)

小窪千早、剣持久木他、よくわかるフランス近現代史、ミネルヴァ書房、2018年、212(150-151, 164-169, 172-183, 186-191)

塚田鉄也、大矢根聡他、日本外交からみる国際関係、ミネルヴァ書房、2019年、印刷中
春名展生、坪井秀人他、日本研究をひらく「国際日本研究」コンソーシアム記録集2018、晃洋書房、2019年、184(33-45)

Seiko Mimaki, Felix Roesch, et.al, Modern Japanese Political Thought and International Relations, Rowman & Littlefield, 2018, 270(93-109)

Yuichiro Miyashita, Gérard Bossuat, et.al, Jean Monnet et l' 'economie', Peter Lang, 2018, 252(33-48)

森田吉彦、吉田松陰『孫子評註』を読む 日本「兵学研究」の集大成、PHP研究所、2018年、393

三牧聖子、菅英輝他、グローバル・ガバナンス 理論・歴史・規範、法律文化社、2018年、278(167-184)

2017年

葛谷彩、小川浩之、西村邦行、板橋拓己、塚田鉄也、小窪千早、妹尾哲志、劉仙姫、三牧聖子、宮下豊、森田吉彦、歴史のなかの国際秩序観 「アメリカの社会科学」を超えて、晃洋書房、2017年、249

妹尾哲志、菅英輝他、アメリカの核ガバナンス、晃洋書房、2017年、320(247-270)

妹尾哲志、初瀬龍平他、国際関係論の生成と展開 日本の先達との対話、ナカニシヤ出版、2017年、387(137-147, 75-86)

2016年

Aya Kuzuya, Helmut Wagner, et.al, Unser Europa: Die Konstruktion und Zukunft der Europäischen Union: Ein Unikat, LIT Verlag, 2016, 318(299-312)

板橋拓己、黒いヨーロッパ ドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋(アーベントラント)」主義、1925-1965年、吉田書店、2016年、261。

西村邦行、大矢根聡他、日本の国際関係論：理論の輸入と独創の間、勁草書房、2016年、190(108-123)

三牧聖子、柳原正治他、安達峰一郎 日本の外交官から世界の裁判官へ、東京大学出版会、2016年、296(127-146)

宮下雄一郎、フランス再興と国際秩序の構想 第二次世界大戦期の政治と外交、勁草書房、2016年、504

森田吉彦、五百旗頭真他、高坂正堯と戦後日本、中央公論新社、2016年、286(101-129)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

板橋拓己 (ITABASHI, Takumi)

成蹊大学・法学部・教授

研究者番号：80507153

小川浩之 (OGAWA, Hiroyuki)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：70612274

小窪千早 (KOKUBO, Chihaya)
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：00362559

妹尾哲志 (SENOO, Tetsuji)
専修大学・法学部・准教授
研究者番号：50580776

塚田鉄也 (TSUKADA, Tetsuya)
桃山学院大学・法学部・准教授
研究者番号：00551483

西村邦行 (NISHIMURA, Kuniyuki)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70612274

春名展生 (HARUNA, Nobuo)
東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授
研究者番号：20759287

三牧聖子 (MIMAKI, Seiko)
高崎経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：68579019

宮下雄一郎 (MIYASHITA, Yuichiro)
法政大学・法学部・教授
研究者番号：80711043

森田吉彦 (MORITA, Yoshihiko)
大阪観光大学・国際交流学部・教授
研究者番号：70459387

(2)研究協力者

阿曾沼春菜 (ASONUMA, Haruna)、宮下豊 (MIYASHITA, Yutaka)、劉仙姬 (YU, Sunhe)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。